

国内の湖畔観光地に関する基礎的研究

4つの湖畔観光地を事例に過去の発展過程や現在の空間構成に注目し、今後の湖畔観光地の在り方について考察したものである。結論としては観光地として大きく発展する段階において、空間構成に関しては必ずしも計画的になされたわけではなく、初期の自然発生的な空間が現在まで引き継がれ、現在では良好な観光地づくり（湖畔の親水空間としての活用など）の弊害となっている点が指摘できた。一方で近年では湖畔空間を「見る場」から「憩いの場」「自然に親しむ場」として見直し、様々な取り組みがはじめられ、今後の動向が注目される。

●中野文彦 麦屋弥生 梅川智也

目次

本編 「国内の湖畔観光地に関する基礎的研究」非公開

第1章 はじめに

1. 研究の背景と目的
2. 国内の湖沼の概要
3. 既存研究
4. 本研究で扱う湖畔宿泊観光地（研究対象の抽出）

第2章 湖畔観光地の歴史的な発展過程

1. 湖畔観光地の発展過程
2. まとめ

第3章 湖畔観光地の空間構成

1. 広域的空间構成
2. 市街地部の空間構成
3. まとめ

第4章 湖畔観光地の問題点

第5章 湖畔空間の活用

第6章 まとめと今後の課題

1. はじめに

環境省の調査²⁾によれば、わが国の天然で1ha以上の湖沼は478存在し、この内の6割以上に当たる309の湖沼で釣り、ボート、キャンプ等何らかのレクリエーション的利用がなされている。また、特に湖沼そのもの及び湖沼を含む景観が観光資源として高く評価された地域、また湖岸で温泉が湧出した地域では、湖岸に宿泊施設や物販・飲食施設、観光施設が立地し、観光地として大きく発展してきた。しかし、現在のそうした観光地の多くは、「水辺を楽しむ」といった湖畔空間の本来持つ魅力を味わえるような空間的な整備がなされていないのではないだろうか。

本研究では、『湖沼が魅力の核の一つとして大きく発展した観光地』を「湖畔観光地」として捉え、①観光地としてどのような発展過程を歩んできたか、②現在どのような空間構成を形成しているのかの2点に着目し、現在の空間構成の問題点とその要因について明らかにし、また近年の先進的な事例から、湖畔観光地の今後の整備の在り方についての考察を試みる。

2. 研究対象の抽出

研究の対象地としては、我が国における代表的な湖沼（観光資源評価が高い³⁾）であり、湖周辺に飲食施設・観光施設等が整備され、また宿泊施設が一定以上の整備されている（収容力2000人以上）を有していることを条件とし、さらにある程度の歴史的な発展過程が見られるといった視点を加え、阿寒湖／阿寒湖温泉（北海道阿寒町）、十和田湖／休屋地区（青森県十和田湖町・秋田県小坂町）、河口湖・河口湖南岸（山梨県河口湖町）、諏訪湖・上諏訪温泉（長野県諏訪市）の4地域を研究の対象とした（表1）。

3. 湖畔観光地の歴史的な発展過程

（1）阿寒湖畔／阿寒湖温泉（北海道阿寒町）

湖畔から温泉が湧出していた事、天然記念物マリモの発見等から観光地として注目されはじめた。大正13年以降には国道整備・バス開通と積極的なインフラ整備が行われ、次第に宿泊施設の整備や湖畔遊覧の導入が行われた。昭和9年に「阿寒国立公園」に指定されると、道東観光の拠点として賑わうようになる。戦後には観光客は急激に増加し、それに合わせてスキー場、バスターミナル、水族資料館等が整備された。阿寒湖畔一帯の地主であった前田家は昭和9年の国立公園指定以降「切る山から見る山へ」と森林環境の蘇生に勤めてきたが、前田家の財産を寄付する形で、昭和58年ナショナルトラスト「前田一步園財団」が設立され、自然環境の保全活動が積極的に行われる

ようになった。近年ではネイチャーガイドやカヌーが行われるようになっている他、平成13年には「まちづくり協議会」が発足し、住民が主体となった観光地づくりが模索されている。

（2）十和田湖畔／休屋（青森県十和田湖町・秋田県小坂町）

十和田神社を中心に信仰の対象として、また鉱山の開発により知られていたが、明治37年小坂鉄道開通、同42年に一般旅客の運輸営業の開始により、文人等が十和田湖を訪れるようになり、雑誌・紀行文に「十和田湖」が紹介されるようになった。その後も大正4年新聞社主催の新日本三景に入選、昭和2年日本新八景入選、同3年名勝天然記念物指定と全国的な観光地として知られるようになり、遊覧船・旅館等の整備が行われた。こうした気運の中で昭和11年に「十和田国立公園」として指定されるに至る。なお昭和6年に法奥沢村は十和田湖村（現十和田湖町）に村名を改称している。戦後は科学博物館完成（昭和28年）、昭和43年湖畔一周道路開通、昭和49年国民宿舎とわだ完成と開発が進められ、現在に至っている。十和田湖町では国立公園と整合性を持った景観づくりを推進するため、平成8年「十和田湖町景観ガイドライン」を策定している。

（3）河口湖畔／河口湖南岸（山梨県河口湖町）

大正2年船津－上吉田間の馬車鉄道が開通し、中央線大月駅と結ばれ、また同5年にバスが運行開始された。昭和に入ると富士山麓鉄道の富士吉田駅までの営業開始（昭和4年）、富士吉田－甲府間のバス運行（同6年）等、富士山麓鉄道（現・富士急行株式会社）を中心とした観光開発が進められた。昭和11年には富士箱根伊豆国立公園に編入、湖岸周遊道路整備がされ

表-1 対象湖畔観光地の概要

湖沼概要	湖名	阿寒湖	十和田湖	河口湖	諏訪湖
	面積(km ²)	13.0	61.1	5.7	12.9
	周囲(km)	31.0	53.0	21.0	18.0
	資源評価※1	A	SA	A	B
対象地	阿寒湖温泉 北海道阿寒町	休屋 青森県十和田湖町・ 秋田県小坂町	河口湖南岸 山梨県河口湖町	上諏訪温泉 長野県諏訪市	
宿泊形態／軒数※2	ホテル／2 旅館／12 民宿／8	ホテル／1 旅館／10 公的宿泊施設／1 民宿／9	ホテル／7 旅館／36 公的宿泊施設／2 民宿／3 ペンション／30	ホテル／9 旅館／19 公的宿泊施設／7 民宿／1	
収容人員(人)※3	7744	3028	10070	4444	
観光地概要	ビジャーセンター アイスコタン 阿寒国設スキーリング スケート場 ネイチャーセンターエコパーク 野営場	陶芸の森美術館 十和田科学博物館 花鳥渓谷(バラ園) 久保田一竹美術館 大石袖伝統工芸館 十和田ビジャーセンターサイクリングコース	河口湖新倉掘抜史跡館 河口湖美術館 久保田一竹美術館 大石袖伝統工芸館 河口湖クラフトパーク オートキャンプ場 河口湖野猿公園 河口湖ハーブ園 河口湖温泉郷	原田泰美術館 高島城 諏訪湖間欠泉センター 諏訪北澤美術館 諏訪湖畔の科学館 温泉植物園 片倉館	
主な周辺施設	遊覧船 カヌー 釣り 水上スケート 水上祭り	遊覧船 釣り 水上フェスティバル	遊覧船 貸しボート 釣り	遊覧船 ヨット(ヨットハーバー) 釣り 水上祭り	
その他	阿寒国立公園	十和田八幡平国立公園	富士箱根伊豆国立公園	都市計画区域指定あり	

※1 参考文献2)より

※2 参考文献3)より

※3 (財)日本交通公社による推計値

ている。戦後になると、昭和25年富士急行線河口湖駅開業、同39年富士山自動車道（富士スバルライン）開業、同44年中央自動車道河口湖インターチェンジ開業、同45年河口湖大橋開通等、急速にインフラの整備が進められた他、ペンションや貸別荘の開発が進められる等、富士山周辺の観光拠点として発展した。平成にはいると美術館、ミューズ館等が整備され、湖畔の開発が進められた。一方、平成11年「自然環境を守り育む条例」、同13年「法定外目的税・遊魚税」を施行し、税収を環境整備・保全に役立てる仕組みを整えている。

（4）諏訪湖畔 /

上諏訪温泉（長野県諏訪市）

諏訪湖畔は古代から温泉の湧出がみられ、また城下町・宿場町であったこと等から古くから賑わっていたが、明治38年中央線・上諏訪駅の設置により、それまでほとんどが水田であった湖畔に向けて、次第に旅館が進出するようになった。大正から昭和にかけての製糸業の隆盛も温泉の発展に結びつき、住民や工員の福利厚生施設（片倉館：昭和3年）として、市や製糸事業者が共同浴場を開設した。この頃から湖畔は納涼、ボート遊び、スケート等、市民・観光客の憩いの場として利用されていた。また昭和10年にはいち早く都市計画区域が設定されている。戦後は、精密機器産業の発展から新産業都市に指定される一方で、昭和28年湖畔公園整備、同45年高島城天守閣の復元等観光地としても大きく発展した。また、昭和47年に源泉を9つの市営源泉に統合し、市全域で温泉利用が可能となった他、昭和58年間欠泉噴出・整備、同61年上諏訪駅露天風呂整備が行われ、同63年には湖畔公園が現在の形に整備されるに至っている。

表－2 対象湖畔観光地の観光開発に関する概略史

	阿寒湖畔 (阿寒湖温泉)	十和田湖畔 (休屋)	河口湖畔 (河口湖周辺)	諏訪湖 (上諏訪温泉)
明治以前		(信仰の対象) (筑山開発)	(河口湖以西の中心都市)	(城下町・宿場町)
戦前	山林業による開拓(M39) マリモ天然記念物指定(T10) 国道240号(マリモ国道)改修・湖畔まで延伸(T13) 阿寒横断道路開通(弟子屈一阿寒湖畔)(S5) 阿寒国立公園指定(S9)	ヒメヌス養殖が始まる(M2) 十和田鉢山衰退(M26頃) 文人などによって十和田湖の自然が紹介される 新日本八景湖沼部の一部一位受賞(S2) 法奥沢村から十和田村に改称(S6) 十和田国立公園指定(S11) 十和田科学博物館開館(S28)	上吉田からの馬車鉄道開通(T2) 河口湖上祭はじめる(T9) 富士山麓鉄道現富士急行)富士吉田駅開通(S4) 国道8号開通、吉田一船津一甲府間バス開通(S7) 富士箱根伊豆国立公園指定(S11) 湖岸周遊道路開通(S11)	中央線上諏訪駅開業(M38) 製糸業によって栄える(～昭和初期) 片倉館建設(S3) 上諏訪町都市計画区域設定(S10) 上諏訪町と豊田村、四賀村が合併し諏訪市となる(S16)
昭和21～40	マリモ国道(R245)舗装完成 スキー場一期整備(S38) 湖畔駐車場・バスター・ミナル整備(S40)	十和田町誕生(S30) 十和田八幡平国立公園に改称(S31) 十和田湖温泉郷(奥入瀬)開湯(S38)	富士急行線河口湖駅開業(S25) 国際スケートセンター(現富士急ハイランド)開業(S36)	諏訪湖畔公園開設(以降順次拡張)(S28) 諏訪市美術館開館(S31) 内陸ではじめて新産業都市の指定を受ける(S39)
昭和41～63	アイヌ民族文化保存会発足(S43) 水族資料館開館(S49) マリモ展示センターオープン(S53) ナショナルトラスト(前田一步園財団)設立(S58) ビジターセンター新築(S59)	十和田・奥入瀬ライン、湖畔一周道路開通(S43) 国民宿舎とわだ竣工(S49) 十和田湖畔に改称(S50) 町民の家「湯治場」完成(S62)	船津浜埋め立て・駐車場整備(S40) 中央自動車道河口湖IC開通(S44) 河口湖大橋開通(S46) ペンション開発が進められる(S50年代) 富士箱根伊豆国立公園普通地域内建築物設置指針設定(S62)	信州ビーナスライン開通(S43) 高島城天守閣復元(S45) 源泉統合・市管理(S47) 間欠泉噴出(S58) 上諏訪駅露天風呂整備(S61) 湖畔公園が現在の形となる(S63)
平成元～12	ネイチャーセンター開設(H3) マリモ展示センターリニューアル(H8) まちづくり協議会発足(H13)	奥入瀬ロマンパーク・観光物産館・道の駅オープン(H6) 景観ガイドライン策定(H8) 十和田一八甲田ルート通年通行(H10)	美術館、ミューズ館、フィールドセンターなど整備(H3～) 「自然環境を守り育む条例」策定(H11) 法定外目的税・遊魚税導入(H13)	原田泰治美術館開館(H10)

4. 湖畔観光地の空間構成

（1）阿寒湖畔／阿寒湖温泉

阿寒湖畔は全域が阿寒国立公園区域に指定されており、温泉街以外の区域のほとんどが特別地域に指定されており、集団施設地区に指定されている温泉街以外は原生の自然の維持され、ほとんど開発されていない。温泉街は湖岸園地と温泉街の中央を走る道路の間に宿泊施設が立地し、道路を挟んで国道側に飲食店・土産物店を中心とする市街地が構成されており、空間的特徴としては、湖・湖岸園地とメインストリートの間に大型の旅館が立地している事があげられる。これにより宿泊者は旅館・ホテルからは湖面の景観を楽しむことができる一方で、メインストリートと湖・湖岸園地は宿泊施設により空間的に断絶され、温泉街を歩く観光客は湖を認識できず、親しめるような空間が少なくなっている。

（2）十和田湖畔／休屋

十和田湖畔も十和田八幡平国立公園に指定されており、特別地域及び休屋付近の集団施設地区で構成されている。休屋地区の特徴は、半島という地形的な違いはあるものの、阿寒湖温泉と同様な形態で、湖及び湖岸園地と、骨格となるメインストリートとの間に大型の宿泊施設・観光施設が立地し、その後背部に土産品店・飲食店、駐車場等が配する構成となっており、湖と親しめる空間は乏しくなっている。

（3）河口湖畔／河口湖南岸

河口湖畔については、湖岸は一周道路が整備され、その道路沿いに分散して宿泊施設・園地等が立地して

おり、観光施設も半島部等の園地部に分散して立地している。このため観光地として中心となる部分が明確でなく、また湖岸から離れた後背の地域に宿泊施設が多く立地している。これは国立公園の特別地域外の地域であり、比較的開発が容易な地域での開発が進められた結果といえる。

(4) 諏訪湖畔／上諏訪温泉

諏訪湖畔は市街地・工業地として発展したこともあり、湖周囲はほとんどが市街地・工業地となってい。上諏訪温泉街の湖岸には約1kmに及ぶ湖畔公園が設置されており、旅館街はメインストリートとなる道路を挟んで立地している。諏訪湖畔は湖畔公園—メインストリート—温泉街という構成であり、そのため観光客等の来訪者は湖畔を容易に認知し、親しむことができる空間となっている。

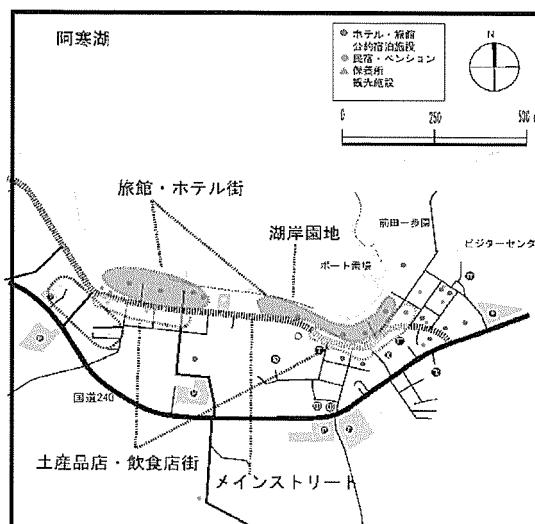


図1 阿寒湖・阿寒湖温泉の概略図

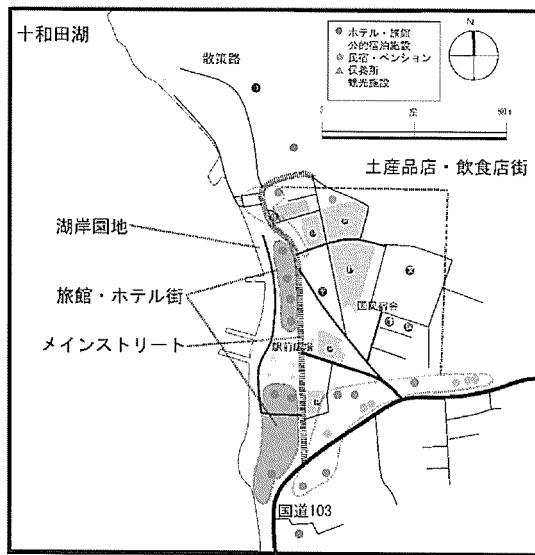


図2 十和田湖・休屋地区の概略図

5. 湖畔観光地の問題点

阿寒湖／阿寒湖温泉、十和田湖／休屋については、明治～昭和初期に資源性が評価され、道路等のインフラ整備、宿泊施設の整備が進められてきた。両地域とも、国立公園指定以前に温泉街の原型が形成されていたため、湖畔園地—大型宿泊施設—メインストリートといった宿泊施設優先ともいえる空間構成が現在まで大きく影響し、湖岸園地は宿泊施設のバックヤード的な空間となってしまっている。河口湖／河口湖南岸についてでは道路・鉄道、高速交通といったインフラ整備が進められたことにより宿泊拠点として大きく発展してきたが、湖と親しめる空間は部分的に整備されているに止まっている。一方、諏訪湖／上諏訪温泉は観光以外の産業の発展により、総合的な都市的整備が進められ、湖畔公園は都市公園として整備されたことで住民・観光客双方に親しまれる空間となっている。

それぞれの湖畔観光地の発展経緯がその空間構成に与えた影響は大きく、民間のインフラ整備や温泉街の発生等と自然公園指定の時期とが必ずしも相互にうま

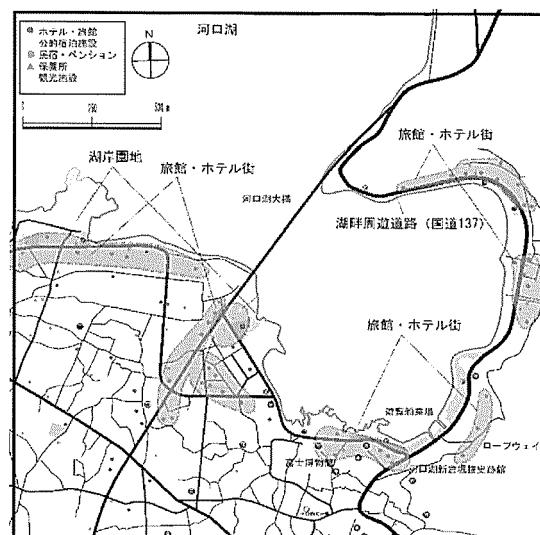


図3 河口湖・河口湖南岸の概略図

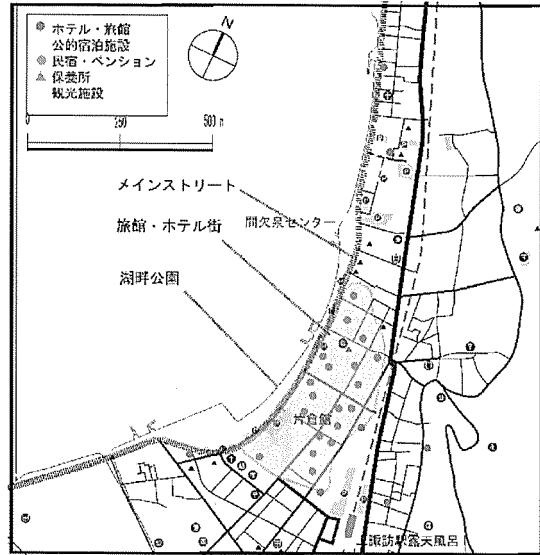


図4 諏訪湖・上諏訪温泉の概略図

く作用しなかった、あるいはむしろ都市公園としての整備によって親水性が確保されたというような結果を見ることがある。

6. 湖畔空間の活用

近年では今回取り上げた4事例の中でも、湖畔に親しむ、親水性の高い空間づくりへの取り組みがはじめられている。

諏訪湖の例では前述のように繊維産業の発達とともに、早くから湖畔の観光・レクリエーション利用がなされてきたが、環境の悪化が進んだ昭和40年代以降、水質浄化とともに湖畔の大規模な埋立による公園整備が進められた。昭和63年には建築家によって公園の全体計画がなされ、駐車場、遊歩道など湖畔の一体的な整備がなされている。また、美術館といった文化施設の整備の他、間欠泉、足湯などの温泉を楽しむ施設も整備され、現在のような湖畔に容易に親しむことのできる空間となっている。

阿寒湖温泉では平成13年に「阿寒湖温泉まちづくり協議会」が発足し、湖畔を含めた温泉街の活性化に取り組んでいるが、多くの観光客に湖に親しんでもらうために、湖畔を花で飾る「花いっぱい運動」が展開

されている。これはこれまで旅館のバックヤードであった湖岸園地に観光客の足を向けさせようと言う取り組みであり、また湖畔の散策を一層楽しめるよう、湖畔を眺めることのできる敷地内に「足湯」を整備する旅館も出はじめている。阿寒湖温泉と同じく国立公園の集団施設地区である十和田湖休屋地区でも平成11年「十和田湖休屋駅前地区街並みづくり勉強会」が開催された。ここでは層雲峠温泉（北海道上川町）で具体化した市街地再開発の手法による一体的な街並み整備が検討された他、地元ガイドによる体験観光への取り組みもはじめられた。こうした「まちづくり」への取り組みでは、行政、旅館経営者、小売業者、住民及び環境省を加えたコンセンサスづくりが可能となり、ま住民自らが積極的にまちづくりに関わることで、従来の観光地とは異なる「湖畔でゆっくりと過ごす」といった空間が整備されはじめている。

また、河口湖町では“五感文化構想”－富士山と湖のある文化の町づくりとして約10年前から湖岸の園地整備の他、ハーブ園、美術館の整備が進められているが、環境省の許可を受ける形で国土交通省の「ウォーキングトレイル事業」による湖畔遊歩道を整備している。また、法定外目的税（遊魚税）によるトイレ・駐車場の整備も注目を集めている。

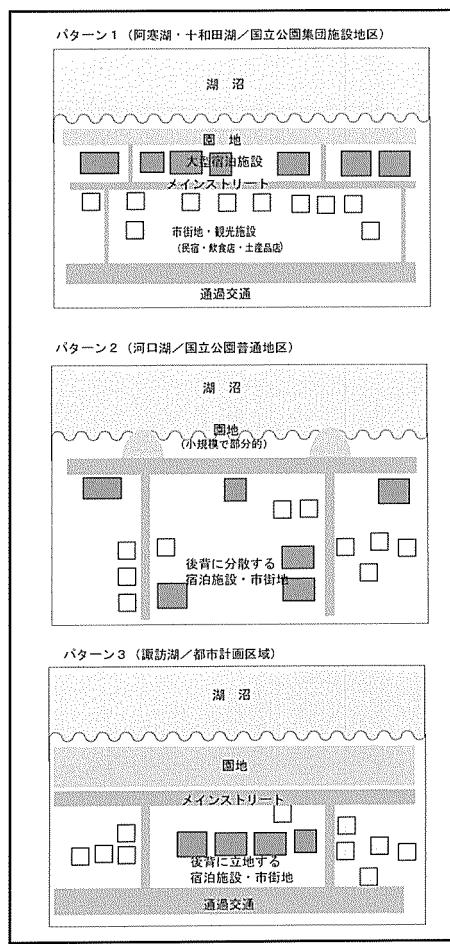


図5 湖岸の空間構成パターン



図6 諏訪湖／湖畔公園



図7 諏訪湖／湖畔公園の遊歩道

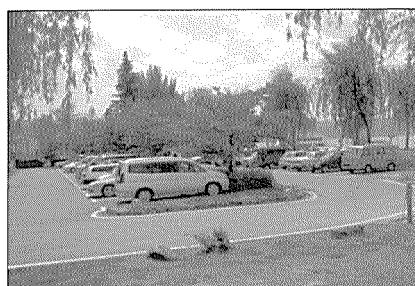


図8 諏訪湖／湖畔公園の駐車場

7. まとめ

本研究で取り上げた4つの湖畔観光地に関しては、観光地としての発展に伴い、都市計画区域指定や自然公園法の集団施設地区計画に指定され、整備が進められてきたが、国立公園に指定されている阿寒湖、十和田湖、河口湖では環境保全とのバランスから大規模な整備・開発は進められず、また環境省、地元行政、民間事業者といった関連組織の複雑さにより、湖畔の一体的な整備には至らなかった。

現在でも一体的な整備は困難であり、進んではいるのが現状ではあるが、近年では「まちづくり」といった視点や環境とのバランスを踏まえた上での様々な事業が取り組まれ、湖畔観光地が本来持つ魅力を踏

まえた整備が進められている。

湖畔観光地が湖を単に景観として眺める観光資源といった認識から、来訪者が湖を容易に認識でき（湖との一体感を持ち）、湖畔での活動を促すような親水空間として認識し、観光地として一体的な整備を進めることは、今後観光地、特に宿泊拠点として発展していくためには不可欠な要素だろう。現実に諏訪湖畔の例のような大規模な整備・開発は困難でも、「まちづくり」等の活動を通して関係各所、特に地元事業者、住民が湖畔の魅力に対して一定のコンセンサスを得ることができれば、湖畔の魅力付けといった共通した方向性をもち、ある程度の一体性、統一感をもった整備も可能であり、こうした手法は今後の観光地整備にとても重要な手法であろう。



図 9 阿寒湖／花いっぱい運動



図 10 阿寒湖／花いっぱい運動で整備された花壇

【主要参考資料】

- 1) 景観資源の評価に関する地理学的研究 (1985) : 溝尾 良隆
- 2) 環境庁自然保護局 (1995) : 第4回自然環境保全基礎調査・湖沼調査
- 3) 財団法人日本交通公社 (2000) : 観光資源台帳
- 4) アサヒ出版 (2001) : 全国版宿泊表 2001.5
- 5) (財) 国立公園協会編 (2000) : 自然公園の手引き
- 6) 各市町村誌、要覧、パンフレット等各種資料

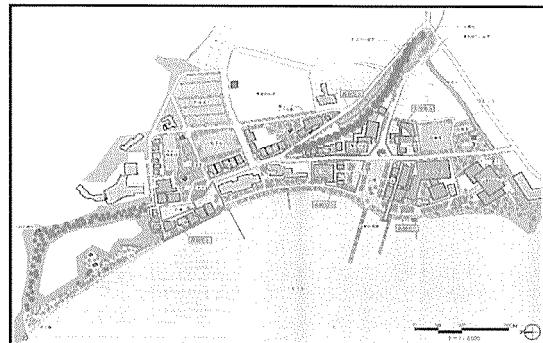


図 12 十和田湖／休屋地区駅前街並みづくり
(休屋駅地区整備構想)

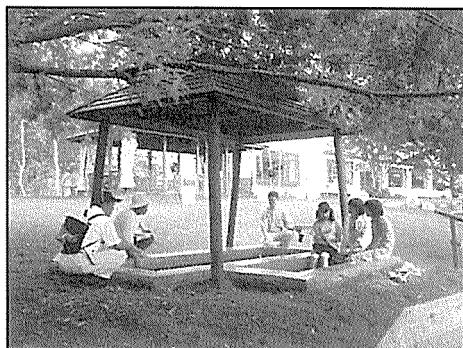


図 11 阿寒湖／湖畔を眺めることのできる足湯

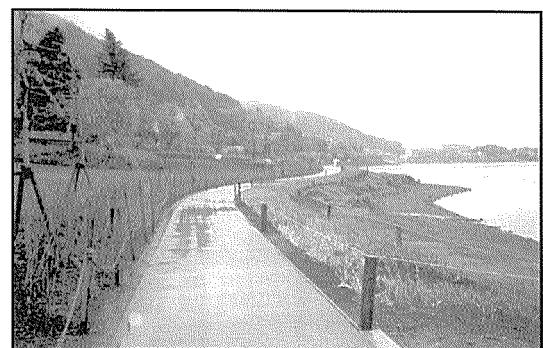


図 13 河口湖／ウォーキングトレイル